



Title	日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界：第5章 出稼ぎと帰国にともなう子どもの保育をめぐる現状と課題
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 21, 79-93
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22661
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P79-93.pdf



第5章 出稼ぎと帰国にともなう子どもの保育をめぐる現状と課題

第1節 はじめに

日系ブラジル人の出稼ぎにともなう子どもの問題は、学校教育の段階では主要な問題とされてきたが、その前段階である幼稚園や保育所では、学校教育ほど問題とされてこなかった。その要因を考えると幼稚園や保育所は、学校教育とは異なり、学習という形態をとらないために、学習の遅れなどの明確な問題として現れにくい。また、異文化への適応の問題として考えた場合も、小さければ小さいほど適応能力は高いと考えられ、ゆえに幼児期はあまり問題とされなかったといえる。

しかしながら、子どもの年齢が低いからといって問題がないわけではない。実際、出稼ぎという問題としてではなく、多文化保育全体で見るとすれば、すでにいくつかの問題が提起されている¹⁾。また、われわれが以前行った保育所の調査でも、日本の保育所に子どもを預けている日系ブラジル人保護者が、子どもの保育所での生活を通し文化の違いに戸惑いを感じ、子どもの日本人化を危惧している不安な思いが見られた²⁾。

今回ブラジルを訪問するにあたり、ぜひ現地の保育施設を見たいと考えたのは、このような背景があったからである。

ブラジルではどのような保育が行われ、親たちは何を望んでいるのか、またブラジルの保育関係者は日本への出稼ぎの問題をどのように感じているのだろうか、さらに日本の保育所に入所していて、ブラジルに戻った場合にはどのような問題があるのだろうか。本稿ではこれらの点をあきらかにしていきたい。

第2節 ブラジルの保育事情について

第1項 保育制度について

はじめに、現在のブラジルの保育が何に基づいて行われているのかについて確認したい。ブラジルにおける保育制度は、1996年に公布された「教育の方針と基礎に関する法律³⁾ (Lei de Diretrizes e Bases da Educação Nacional, 通称LDB)」において定められている。そこでは『基礎教育は幼児教育、初等教育と中等教育からなる』(LDB第21条)とあり、『国は0歳から6歳までの子どもに対する義務として、幼児教育と公立の無償の保育所を保障しなければならない』(LDB第4条)としている。

また、LDBでは『幼児教育は、3歳までの子どもに対しては「Creches」(保育所)か同等の施設を、4歳から6歳の子どものためには「Pré-escolas」(幼稚園)が提供される』(LDB第30条)としている(表1)。

さらに幼児教育の目的について、『基礎教育の始まりである幼児教育では、6歳までに体、精神、知能、社会の様々な部分に対する発達を目的としている』ことに触れ、それが『学校教育だけではなく、家庭や地域の役割である』(LDB第29条)ことも謳っている。

また、それらの目的を達成するため、観察と記録によって評価することも明記されているが、それが、初等教育への進学など、上級クラスへの合格を目的としないことも示されている(LDB第31条)。

このように、法律では幼児教育の必要性やその目的について規定しているが、実際には全ての幼児教育施設がそのレベルに達するには至っておらず、教育内容、施設や設備などは個々の園に任されているというのが現状である。

そもそもブラジルにおいて幼児教育は、従来それほど注目されてこなかったという経緯がある。それは基礎教育と定義されている初等義務教育でさえ、貧困のためにドロップアウトしてしまうほどであったことと無縁ではない。だが1990年、タイで行われた世界大会“Educação para todos”を契機に、幼児教育にも次第に注目が寄せられるようになってきた。それに加え、先にみたように国の制度としても、幼児教育に対してその重要性が認められるようになってきたという現状である。しかし現実には、制度は出来たものの実態を伴ったものとはなっていないことが幼児教育関係者から指摘されている⁴⁾。

表1 ブラジルの幼児教育システム

教育段階	幼児教育	名 称	年限	年齢
	保育園	クレッシ	4	0～3
	幼稚園	プレ・エスコラ	3	4～6

第2項 保育施設の名称

日本において保育という場合、保育所と幼稚園という2つの施設が大半を占め、認可外の託児施設や幼児教室もあるものの、その割合は全体から見れば少数である。そのため、それら2施設の認知度は高く、幼稚園といえば教育を行う施設であり保育時間は短く、保育所といえば保護者に代わり保育する施設であり保育時間は長いという認識が一般的である。

その認識をもとにブラジルにおける保育施設をみると、クレッシ (Creches) のように公立の福祉的な意味合いの強い保育施設は別として、それ以外の、特に民間の施設は、教育的な保育内容の有無や、保育時間によって保育所や幼稚園という分類は出来ない。先にみたLDBに定義されていたように、0歳から3歳までの低年齢の乳幼児を対象とした施設を保育所、4歳から就学前までの幼児を対象とする施設は幼稚園と、年齢別の分類が一般的である。

さらに同じ年齢の子どもを対象とした保育施設であっても、そこで行われている保育の内容は様々であり、それに対応するように施設の名称も多数存在する。

まず0歳～3歳までの低年齢の子どもを保育する施設としては先にも述べたが、公立の施設であるクレッシ (Creches) という名称がある。一方で私立の保育所は揺りかごという意味を持つ、ベルカリオ (Berçário) や母・愛情という意味を持つマテルナル (Maternal) と呼ばれることが多い。

幼稚園段階の4歳からはさらに多様な名称が使われている。「庭・園」という意味を持つジャルディン (Jardim)、「子ども」という意味を持つインファンシア (Infância) や、「幼年期」という意味を持つインファンティウ (Infantil) などを組み合わせて、ジャルジイン・インファンティウ、あるいはジャルディン・インファンシアなどという名称で呼ばれることが多い。また近年は、教育的なことを強調するために、エドゥカソンを付けて、エドゥカソン・インファンティウ (Educação Infantil)、エスコラ・インファンティウ (Escola- Infantil) という名称の施設もある。このように多様な名称であるが、これらは日本語に翻訳するならば全て幼稚園ということになり、各々の園がいかに関育の内容を反映させるよう表現した名称となっているかがわかる(表2)。

表2 年齢別による保育施設の名称

年齢	年齢別名称	バリエーション
乳幼児段階 0歳～3歳	クレッシ マテルナル	Creches
		Maternal
		Berçário
幼児段階 4歳～5歳	ジャルディン	Jardim
		Infância
		Infantil
就学前 6歳	プレ	Pré-escola
		Pré-primaria

第3項 年齢別保育

先のようにブラジルの保育施設は、日本の幼稚園、保育所とイコールではない。むしろ児童の年齢によって、0歳～3歳未満は保育的意味合いが大きく、3歳以上～6歳までが教育的意味を重視しているようである。そのため年齢毎に分けられたクラスには、その年齢を表す名称が付けられている。

日本においても保育所や幼稚園では「未満児」「年少」「年中」「年長」などの年齢別の名称が見られるが、その違いによって保育の内容が大きく変えることは少ない。どちらかと言えば発達段階に合わせて、出来る遊びを深めていくということの方が重視されている。それは日本の保育が遊びを中心としていることに基づいている。本格的な教育は小学校段階からであって、それ以前に教育に関する具体的な達成目標は定められていない⁵⁾。

一方ブラジルでは、特に就学前1年の教育を重く見ており、プレ（Preparaçãoの通称）として小学校に入学する前の1年間を準備期間として捉えている。それ以前もジャルディン-1、ジャルディン-2、ジャルディン-3と言うような名称や、ミニマテルナル、マテルナルという名称で、行う教育の内容が年齢段階によって異なる事が多い。保育内容の詳細については後述するが、それらは初等教育を受ける準備期間として就学前教育が位置づけられているからにはほかならない。

第4項 保育時間

ブラジルにおける保育施設の保育時間をみると、年齢の高い児童が通園しているいわゆる幼稚園では、半日制が一般的である。およそ午前の部が7時～12時45分まで、午後の部が13時～18時となっており、子どもはそのどちらかに通園する仕組みである。これは公立の小学校が同じように半日入れ替え制であることが影響している。ブラジルでは学校の絶対数が少ないため、1つの施設でより多くの児童を受け入れるための方策であり、幼稚園もそれに準じているといえよう。

そのため現地の公立の保育施設は、ほとんどがこの2部制であるが、私立においてはその限りではない。特に近年では、日本と同様にブラジルでも働く女性の増加とともに、全日保育の需要が高まっているという。そのため、教育を目的とした施設でありながら、一日を通して保育する施設も見られる。そこでは、日本でいう「延長保育」という仕組みもある。詳しくは後述するが、正規の開所時間より以前に登園したり、保護者の仕事の都合でお迎えの時間が遅くなることにも対応しているなど、保育のサービスにおいても多様なものが見られるのである。

第3節 訪問先保育施設の概要

今回、われわれが訪問した保育施設は6施設である。そのほとんどは日系の幼稚園、あるいは日系ブラジル人学校の幼児クラスであるが、その特徴は園によって異なっている。ここでは訪問した保育施設のうち、実際に筆者が訪問し、話を聞くことが出来た4園についての特徴と概要を述べる。

表3 訪問先一覧

訪問日	施設名	地域	教育段階	日系・非日系	面談者
2005年8月22日	Jardin Episcopal 幼稚園	Liberdade	幼児～初等教育	日系	校長
2005年8月22日	赤間学院 ピオネイロ	Vila Climentino	乳幼児～中等教育	日系	園長
2005年8月22日	Sonho Mágico 幼稚園	Vila Gustavo	乳幼児～初等教育	非日系	主任
2005年8月23日	大志万学院	Rua Ferdinando	幼児～中等教育	日系	校長

第1項 大志万学院

大志万学院はブラジル政府の公認校であり、私立の全日制日系ブラジル人学校である。日本語学校が設立の発端となっており、そちらの方は50数年の歴史を持つという。現在の学園は、90年に幼稚園からスタートし、徐々に上級クラスを増やし小中学部を完成させた。ブラジル公認校となったのは93年のことである。

大志万学院はサンパウロの中心部を望む高台の住宅街に位置している。旧校舎は現在の場所と異なる同区にあったが、新校舎の建て替えとともに現在の場所に移転した。校舎を囲む塀はさほど高くはなく、見晴らしもよいため開放的な印象であるが、入り口には警備員が常駐している。

校舎は地上3階、地下1階の斬新なデザインである。テニスコートや、バスケットボールコート、プールなどが完備されている。また校舎にはコンピュータや美術などの各科目に対応した教室（写真1）だけでなく、茶室やシアターなど充実した設備を持つ。

大志万学院の教育の特徴は、日本語教育を重視していることであろう。さらに日本語だけではなく、



（写真1）大志万学院 美術室

茶道や華道などの伝統文化も授業の中に取り入れている。また、学校行事の中にも「運動会」や「よさこいソーラン」などの日本の文化を取り入れた行事が見られる。

幼稚園は基本的に朝8時から17時までの全日保育である。保育料は1ヶ月950リアル（日本円で約51,500円程度：2006年2月現在）であり、別途給食費として100リアル（5,400円程度）必要である。

第2項 赤間学院ピオネイロ

赤間学院は1933年4月、洋裁学校をその始まりとしている私立の日系ブラジル人学校である⁶⁾。幼児クラスが設置されたのは、1971年3月、「Centoro Educacional Pioneiro」（ピオネイロ教育センター）の設立からである。ピオネイロ教育センターは、幼児クラスと小学部の1年生からなり、ブラジルの学校教育制度を全面的に取り入れ、日本の教育の優れた点を取り入れながらブラジルの教育に貢献することを目的に設立された。当校は連邦政府より公益団体として認可された「財団法人赤間学院」により維持されている。責任感と独立精神を伴うことを基本とした人間形成のための全人教育が学院の根本的な方針であるという。

赤間学院ピオネイロは、サンパウロ市内サンタクルース駅から程近い閑静な住宅街ヴィラ・マリアーナ地区に位置している。学院の本部は5階建てになっており、ロの字型の中心は校庭になっている。

幼児部はそこから車で5分ほどのところにあった。校舎は真っ白な高い塀に囲まれており入り口にはガードマンが常駐している。中は一般の住宅を改築したような造りになっており、一つひとつの教室はけっして広くはないが、幼児用の小さな机と椅子が並んでいる。最も年少の児童の教室には午睡用のマットが置いてあった。教室を抜けると園庭があり、ジャングルジムなどの遊具が設置されている（写真2）。園庭をはさんだ向側には、子どもたちが外遊びで汚れた身体を洗い流すためのシャワールームとトイレがある。その横にはプレイルームがあったが、このプレイルームは地域の人たちも出入りしているとのことであった。園舎の構造もあってか、とても家族的な印象を受けた。



（写真2） 赤間学院ピオネイロ園庭で遊ぶ子どもたち 19,464円程度：2006年2月現在）である。

幼児部は3歳から9歳までが同一の校舎である。基本的には半日入れ替え制であるが、希望があれば、全日で保育している。児童の9割は日系人であるが、幼稚園までは日本の教育はしていないという。そのためか幼稚園は園長をはじめとするスタッフの多くが非日系人であった。幼稚園の園児は午前、午後合わせて150人程度である。保育料は半日の場合359リアル（日本円で約

第3項 Jardin Episcopal 幼稚園

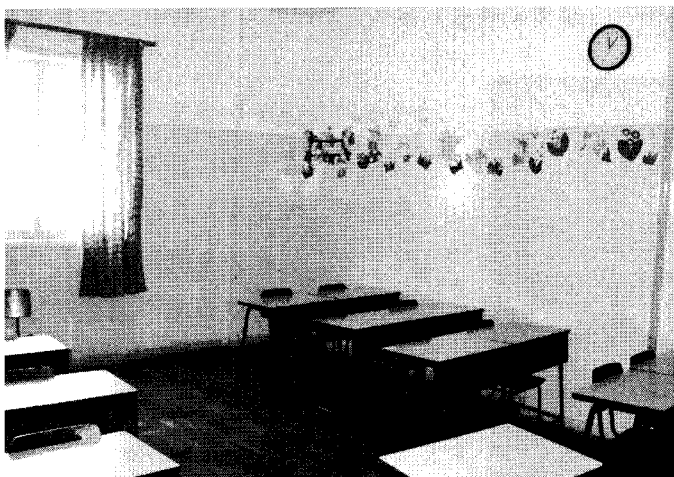
キリスト教を基盤とする私立の日系幼稚園である。園児に日系人が多いだけでなく、スタッフの多くも日系人で構成されている。就学前の園児だけでなく、小学校低学年の児童が、放課後過ごす教育機関としての機能も持っている。そのため、そろばん、水泳、太鼓、ピアノ、笛などの様々なオプションのクラスが用意されているところが本園の特徴と言えるだろう。

Jardin Episcopal 園はサンパウロ市内の日本人街に位置している。間口が狭いために注意をしなければ通り過ぎてしまうほどである。入り口には防犯のための鉄格子の門がありインターホンがついている。中に入るとすぐ細長い通路があり、そこをすすむと園庭に出る。日本でいえば京都の町

屋のように、入り口は狭いが中は広い形状になっているが、この園庭は日本の坪庭とは異なり広さもあるため、普通の屋外にある園庭と変らない印象である。園庭に向かう通路の一方は教室になっている。建物は2階建てになっており、2階にも同じように教室がある。一つひとつの教室は幾分小さめであるが、これはこの幼稚園が通常の保育に加えて、さまざまなオプションのクラスを持っており、それを行う際には適しているのだろう。



(写真3) Jardin Episcopal 園園庭



(写真4) Jardin Episcopal 園教室

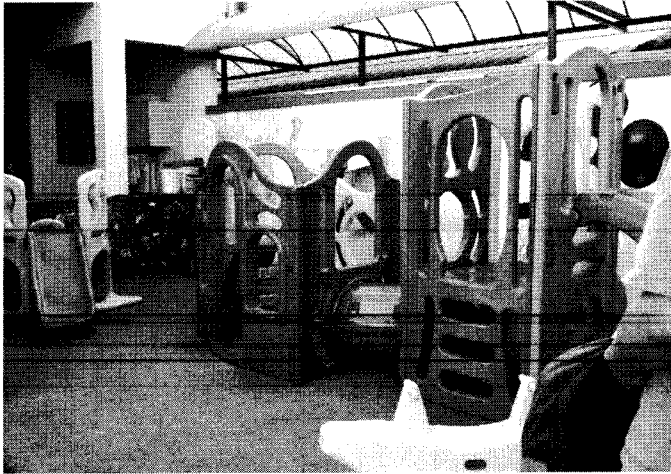
本園の教諭は全部で13名、うち6名はピアノや日本語などの専門講師である。7名の保育者は全て大学卒業者であるが、必ずしも教員免許を持っていない。なぜなら本園の教員の採用基準は日系人であることと、保育者として適しているパーソナリティを持つかどうかを重視しているため、二世でそのような人材を確保するのは難しいからであるという。

Jardin Episcopal 園の園児数は80名程度、1ヶ月の学費は全日保育の場合は180ドル程度（日本円で約21,200円程度：2006年2月現在）であり、半日であれば100ドル程度（約11,770円程度）であるという。さらにピアノ、太鼓、日本語など別に習い事をする場合はそれぞれの金額が加算されることになっている。これはサンパウロの日系ブラジル人の学校としては安いほうであるという。また家庭の事情で払えない場合にも、延期する、安くするなど配慮をしており、中には保育料が払えずに登園している園児もいるという。

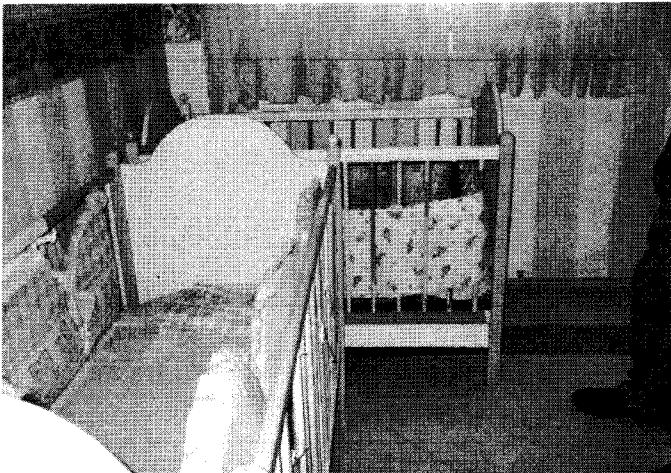
第4項 Sonho Mágico 幼稚園

サンパウロ郊外に位置しており、ごく一般的な住宅街にある、非日系のいわゆる現地の幼稚園である。本園の特徴としては、生後3ヶ月という年齢から全日預かってくれる施設でありながら、教育の機能を持つという点であろう。この施設には0歳から3歳までの子どもたちが入園しており、4歳以上の子どもたちはこの園から数百メートル離れた園舎となっている。

3歳未満児がいる園舎の入り口は、他の園もそうであったように高い塀に囲まれている。しかし塀の上部には園の名称とともにディズニーのキャラクターの絵と、園で使用している教材を明記してあり、ここが幼稚園である事が一目でわかる。入り口には訪問者をチェックするカメラがあり、インターホンで確認をしてからドアを開ける仕組みになっている。



(写真5) Sonho Mágico 園の園庭遊具



(写真6) Sonho Mágico 園乳児クラスのベッド

中に入ると、塀の壁は外壁と同じようにディズニー系の絵が描かれており、明るい雰囲気である。入り口を通り抜けるとまず中庭に出る。床は人工芝になっており、庭が室内にあることと、子どもたちが年少である事への配慮が見られる。庭の周辺には小さめのジャングルジムや滑り台、ボールプールなどが設置されているが、ほとんどの遊具がプラスチック製なので、やや人工的な印象を受ける。

中庭から続いている細長い通路をすすむと、そこは最も年少の子どもたちのクラスになっていた。日本の部屋に例えれば8帖ほどだろうか、子どもたちはベビーラックのような椅子に座っていた。部屋の壁に沿って離乳食スペースがあり、奥にはシャワースペースと沐浴ができるバスタブ、その横には子どもを着替えさせるスペースがあるが、全て保育者の目線に合わせてある。横には各々の子どものバスタオルがかけられてあり、非常にカラフルである。また、それらはとても清潔でありきちんと整

頓されていた。この清潔というキーワードはこの園がとても重視している項目であるようである。この部屋の隣にはベツルームがあり、園児それぞれの専用のベッドが用意されていたが、他の園児と共有することはないことを強調していた。またその奥には調理室もあったが食器や哺乳瓶などが消毒されて並んでおり、その点からも清潔な園であるという印象を受けた。

第4節 保育内容について

このようにそれぞれの特徴を持った各園の保育内容はどのようなものであろうか。ここでは、日系ブラジル人学校の大志万学院、日系幼稚園のJardin Episcopal 園、現地の幼稚園であるSonho Mágico 園についてインタビューや資料を参考に内容を見ていこう。

第1項 大志万学院の保育内容

本学院は基本的に全日制であるが、幼児部も同様に全日の保育である。入園可能な園児の年齢は1歳半からである。一日の流れを時間割をもとに見てみよう。月曜日～金曜日まで、朝は8:00から、帰りは17:00まで、およそ8つの時間に区切られている。また、保育の内容については、年齢別のクラス、J1、J2、E、J3、PREという段階別に、その年齢に必要な教育内容を取り入

れている。一番小さいクラスでも日本語、ポルトガル語、英語にふれる内容になっており、2歳からは教材を使った教育も行っているという。しかし教育といっても、あくまでも年齢に応じた内容であり、遊びとして行っているという。

大志万学院の特徴は日本語や日本文化を取り入れていることであるが、幼児クラスも例外ではなく5歳から日本語の読み書きを取り入れている。また、そのような学力面だけではなく、いわゆるしつけの面も重視している。「やっていいこと、やっていけないことをしっかり教える」ことが幼児期の教育にとって重要な点であると捉えている。

一日に行われる内容をみると「RECREAÇÃO」とよばれる娯楽の時間と、学習の時間に分類できる。学習の内容はクラスごと、曜日によって異なるが「日本語」「英語」「絵画」…などが行われている。

では一日の流れをみていこう。朝は8:00に始まるが、まず8:00～9:30は学習の時間が設けられている。9:30から10:00はお遊びの時間だが、9時45分におやつが出る。朝、何も食わずに来る子どもがいるからだという。10:00～11:30は、再度学習の時間がある。11:30～12:20は昼食の時間である。その後は12:30～13:20まではお遊びの時間があり、13:30～15:00最後の学習の時間がある。それが終わると15:15～15:45までおやつの時間があり、16:00から17:00まではお遊びの時間で1日が終了する。迎えに来られない親がいる場合には、18時半までは子どもを預かるが、夕食は家族で一緒にしてほしいという希望があるため、出さないことにしているという。

表4 一日の流れ (大志万学院)

QUINTA (水曜日)	J 1	J 2 E J 3	P R E
08:00～09:30	MARK/ING (英語)	ERIKO	FRANCO
09:30～10:00	RECREAÇÃO (遊び)		
10:00～11:30	ED ART/MARK (図工)	ED ART/ING (図工) (英語)	ING/ED ART (英語) (図工)
11:30～12:20	ALMOÇO (昼食)		
12:30～13:20	RECREAÇÃO (遊び)		
13:30～15:00	MARK/JAPONES (日本語)	ERIKO	JAPONES/FRANCO (日本語)
15:15～15:45	LANCHE (おやつ)		
16:00～17:00	RECREAÇÃO (遊び)		

※先生の氏名は仮名

第2項 Jardin Episcopal 園の保育内容

Jardin Episcopal 園の特色は、ブラジルの多くの幼稚園がそうであるように、午前クラス、午後クラスに分かれていることである。そのため、午前だけ来る児童、午後だけ来る児童、さらに全日の児童という3グループに分かれている。園児は80人ほどだが、そのうち20人程度の児童が全日保育であるという。

年齢別のクラスは、就学前のクラスである「プレ・エスコリーヤ」以外は、「Shiro gumi」「Aka gumi」「Kigumi」という日本名になっている。

では一日の流れを見てみよう。朝は8:00に登園だが、実際には7時台に登園してくる子どもも

多い。登園後は自由遊びの時間があり、その後9：00にはクラスに入り、朝の挨拶をして、クラスごとの保育が始まる。クラスごとの保育では、音楽、体操、お話、ゲームなどが行われる。10：00はおやつ時間であるが、おやつはパーティなどの特別な日以外は、食べものと飲み物を自分で持参することになっている。10：20にはまたクラス別の活動が行われる。11：20には午前の部が終了し降園となる。その後、全日保育の児童は昼食をとり、13：30から午後クラスのスタートである。14：00からはまたクラスごとの保育が行なわれる。保育の内容では、オプションルとして行う、そろばん、水泳、太鼓、ピアノ、笛、日本語、日本楽器が行われているのが特徴的である。これらは午後のクラス別活動が始まる前の自由遊びの時間を使っているようだ。1ヶ月の間に行った活動の記録は、子どもたちが毎月家庭に持ち帰り、また翌月に持参することになっている。

また本園は入園希望者に対して、園生活のきまりなどが記載されたしおりを用意している。それを見ると、保育日数や出欠についての注意、保育料の納付期限などの事務的な諸注意や、制服などの服装をはじめ、持ち物のきまりなどがポルトガル語で詳しく記載されており、そのような配慮が見られるところもこの園の特徴と言えるだろう。

表5 一日の流れ (Jardin Episcopal 園)

時間	保育内容
8：00	登園 (実際には7時頃登園) 自由遊び
9：00	クラスに入り準備をする グループ別活動
10：00	音楽・体操・お話・ゲーム
10：20	軽食
11：20	クラス別行動
13：30	降園 (半日保育の園児)
14：00	午後の園児登園 オプションルおけいこ
15：00	クラスに入って準備 グループ別活動
15：30	おやつ
16：50	クラス別活動 降園

第3項 Sonho Mágico 幼稚園の保育内容

Sonho Mágico 幼稚園は、非日系のブラジルの保育施設である。対象年齢は3ヶ月から、小学校低学年段階までであり、全日の保育を行っている。

子どもの年齢別にクラス分けをしており、その内訳は、3ヶ月から1歳6ヶ月まではベルカリオ、2歳から2歳11ヶ月まではミニマテルナル、4歳から4歳11ヶ月まではジャルディンI、5歳から5歳11ヶ月はジャルディンII、6歳から6歳11ヶ月まではプレという分類である。

表6 Sonho Mágico 園における年齢別クラス

子どもの年齢	年齢別名称
3ヶ月～1歳6ヶ月	BERCARIO
2歳～2歳11ヶ月	MINI-MATERNAL
3歳～3歳11ヶ月	MATERNAL
4歳～4歳11ヶ月	JALDIM I
5歳～5歳11ヶ月	JALDIM II
6歳～6歳11ヶ月	PRE

1歳未満の子どもたちは託児的な内容が主となるが、2歳からのマテルナルのクラスでは、教材を使った保育も行っている。教材と言ってもその年齢の子どもが興味を持つ題材に、色を塗ったり、線を引いたりするなどの簡単な内容になっている。

3歳からのジャルディンのクラスでは、それらに加えて、ダンス、英語、コンピュータ、カポエラ、水泳などが行われている。

また、本園の職員構成は保育に関わるスタッフに加えて、言語学、心理学、教育学、歯科に関する専門家を顧問としており、全日の保育施設でありながら、より教育的な意味を重視していることを打ち出している。

このように、教材を使用した保育内容や、それを支えるスタッフの構成からも、本園が教育を重視した保育施設であることがわかる。

一般的にブラジルの幼稚園は、午前、午後に分かれているため全日保育をしているところは多くはない。そのような中で、本園は子どもを全日保育し、教育的な保育をも行ってくれる。また、子どもが風邪気味のときは薬を飲ませてくれるなど細かい配慮にも応じてくれ、養護的な部分にも手厚いことなどから子どもの教育に熱心な夫婦共働きの家庭にとって、非常に魅力的な施設であると言えるだろう。

第4項 保育内容の考察

先にみた3つの保育施設は、日系ブラジル人学校の保育施設、日系の保育施設、ブラジルの保育施設と、それぞれ異なる背景の保育施設であった。しかし、その保育内容を比較すると、それぞれの特徴を持ちながら、共通する部分もみられた。

まず日系ブラジル人学校の保育施設である大志万学院と、日系の幼稚園であるJardin Episcopal園では、日本語や日本文化を取り入れていること、基本的なしつけを重視している点などが共通している。子どもへの言葉がけに日本語を取り入れていることはもちろん、行儀についてもしっかり行っている。

「日本人が教育をやる時はきちんとやってもらえるというイメージがあるわけです」(Jardin Episcopal 園長)という言葉にみられるように、遊んで良い時は遊び、勉強の時はきちんと座って行うことや、園生活の中で挨拶などが自然と身につくような保育が行なわれていた。

次に全ての園に共通している点として、日本でいう設定保育が主流であることがあげられる。一日の流れの中に毎日必ず学習の時間が入っており、それが勉強の時間であると位置づけられていることは日本とは異なる点である。日本の保育においても設定保育や、教材を使った保育を行うことはあるが、そこで行われる内容は、どちらかといえば遊びの要素が大きく、小学校の教科に直結しているものではない。今回訪問した園は、その点を比較する限り日本の幼稚園とは異なり、教育的な部分を重視した保育内容であるといえよう。

第5節 出稼ぎと保育

ブラジルの日系人が日本に出稼ぎに行くことについて、ブラジルの保育関係者は、どのように捉えているのだろうか。また在籍する児童の中に、出稼ぎで日本に行ったことがある子どもは存在しているのだろうか。

現地のSonho Mágico 幼稚園を除く3園に、出稼ぎについて聞いてみたところ、実際に児童や児

童の家族が出稼ぎで日本に行ったという話を聞くことが出来た。

以下ではその際の聞き取りから、①家族の出稼ぎによって日本から帰国した児童は在籍しているか。またその数は多いか。②日常の教育で何か問題点を感じているか、またその際の③適応の状況はどうか等について見ていきたい。

第1項 出稼ぎによる帰国児童の有無

われわれが日本において行った保育所調査によれば、子どもを日本の保育所に預けている日系ブラジル人は、他の日系ブラジル人と比較して、比較的高学歴であり、子どもに対しても、高い学歴期待を持っている、母国では比較的高い階層に位置している人たちであるという結果であった⁷⁾。そのため日系ブラジル人学校にはある一定程度の、出稼ぎ帰国児童がいるのではないかと予測された。そこで家族の日本への出稼ぎに伴って、日本から帰国した児童は在籍しているかについて聞いてみたところ、さほど多くはないものの、帰国児童が在籍していることが確認された。

日本からの帰国児童がもっとも多かったのは日本人街に位置しているJardin Episcopal 園である。現在在籍する園児の中でも日本に行った経験のある子どもは4人くらいいるという。さらに、また日本に行く予定がある児童もいるということであった。しかし今はその程度の現状であるが、5年くらい前はもっと多かったという。その頃は皆子どもを（日本に）連れて行くと言っていたようだが、現在は落ち着いていると言う。

大志万学院では、「私立に行ける子どもたちは、月謝を払えなければいけないので、その子どもたちが日本に出稼ぎに行くことはほとんどありえない」と述べていた。「日本に行く子どもたちは皆、州立か市立の方に通っている子どもたちですね」と、日本に出稼ぎに行く人が経済的に恵まれない層であることを述べ、教育に投資することのできる階層が子どもを通わせる大志万学院では、日本に出稼ぎに行く保護者は相対的に見ればそう多くないことを強調した上で、それでもこれまでこの学校に戻ってきた子どもは合計で20人くらいはいるということ述べていた。

赤間学院ピオネイロも、やはり学費が高いことを理由として、本学院と出稼ぎとの関係については否定的であった。父親が日本に出稼ぎに行っている例はあるものの、出稼ぎのため家族で日本に住んでいたというケースは少ないという。そのため、「デカセギをしている子どもに対しての扱いを、特別に考慮するということは無い」と言う。それは出稼ぎが多かった時期もそう変りは無かったという。

このように日系の保育施設では出稼ぎの数はあまり多くはないという事実がみられた。日系の保育施設は全て私立であり、高額な学費がかかる。子どもの教育に投資できるのはある一定水準以上の家庭であり、「日本への出稼ぎに行く者の多くはブラジル国内では恵まれない、どちらかといえば貧しい層の人々だから」だという。

第2項 出稼ぎにともなって生じる問題

先にみたように、今回訪問した園では、日本からの出稼ぎ帰国に伴う児童はあまり多くはないという。とはいえ、これまでにし出稼ぎから帰国した子どもを受け入れた経験は持っている。では、日本から帰国した子どもが入園した場合に生じる問題をどう捉えているのだろうか。

帰国児童が最も多かったJardin Episcopal 園の場合は、「子どものことで言えば勉強の遅れがある。特に学校教育では日本にいてブラジルに帰国した場合、子どもがこちらにきたらついていられないとよく聞きます。しかし、幼稚園段階の小さな子どもたちについてはあまり問題は感じていない。」

(Jardin Episcopal 園長) という。

また、親の問題で言えば、「帰ってきたけれどもお父さんたちの仕事が見つからない。それでまたデカセギに行く…」(Jardin Episcopal 園長) 等の問題が生じるという。

現在ではさまざまな情報が入り、「子どもは連れて行かないほうがよい、子どもを連れて行くのなら、あっちで暮らすようにした方がよい」(Jardin Episcopal 園長) などと耳にすることで、「なるべくは小学校の入学前に帰ってくるとか、幼稚園で慣らしてから入る(小学校へ)とか。だから今はあまり問題はなくなってきた。」(Jardin Episcopal 園長) と感じている。

だが出稼ぎによって生じる問題は、そのようないわばマイナス部分だけではない。Jardin Episcopal 園では、出稼ぎが日本語学習の契機となっていた。出稼ぎが多くなかった頃に比べて保護者たちの日本語教育に関する希望が多くなっているようだ。それ以前は「かえって教えないで欲しいという意見もありましたね」という。それが、出稼ぎが多くなってからは「日本へデカセギに行くということもあるので、お父さんたちが少しでも日本語を教えておきたい」(Jardin Episcopal 園長) という考えが目立つようになった。また、わが子に日本語を教えたいという理由には、子どもと一緒に連れて行くだけでなく、子どもを祖父母に預け出稼ぎに行くため、子どもにも日本語を覚えておいてほしいという期待があるのだという。

また、出稼ぎに行く人の多くは、何のプランも持たず日本に行くことが、結果として様々な問題を生じさせているという見方もある。

「日本に行けば2,000ドルもらえる、1,500ドルもらえる。こちらでは考えられない金額です。じゃあ日本で生きるためにはいくら必要かという、そこまでの計算はないんですよ。」という。日本での生活は消費中心で貯蓄もせずにいるために、家族の生活が安定せず、そのような親の無計画さが結果として子どもに影響する。

「先にお父さんが行って家族が残る。それともお父さんお母さんが行って、子どもたちをおじいちゃん、おばあちゃんに残す。そういう子が1人うちにいたのですが、その子は、ぐれちゃいました。高校に入って、今はまださまよっている最中ですが、すごく芯はいい子です。でもお母さんが彼をおばあちゃんに任せて日本に行った。日本でお父さんと離婚した。それで違う男の人2人と、子どもを2人生んだのですよ。それに対して彼はすごく反抗しているのですよ。ここにいる僕のことさえ見られないのに、もう2人を生んでどうするのだってね。そういうケースでは家族はダメになってしまいますよね。」(大志万学院長)

このように、単なる親の問題だけではなく、家族全体の問題に発展してしまうこともある。それは当然、子どもへの影響も大きいことはいうまでもない。

第6節 再適応の状況

日本からの帰国児童の受け入れ経験を持つJardin Episcopal 園と大志万学院では、児童がどのような再適応の問題を持つと捉えているのだろうか。

在園児童が幼児中心であるJardin Episcopal 園の場合、

「先生はみな日本語がわかるし、日本から帰ってきててもすぐになついてくれるし、他の子どもたちもすぐ遊んでくれるしね。小さい子は、何を言っているかわからないから話さないというのは無いわね。」(Jardin Episcopal 園長)

というように、教員が皆日系人であり、ポルトガル語も日本語も話せることに加えて、子どもたちが幼児期であることが問題を生じさせないと考えているようであった。

しかし、「私たちは小さい子を預かっているから、そちらのほうはあまりよくは知らないですが」と前置きした上で、(日本から帰国してブラジルの学校に転校した場合)「勉強がついて行かない」(Jardin Episcopal 園長)と聞くとのことであった。

幼児期においては大きな問題ではなくても、子どもがある程度大きくなり、教育を受ける段階になると問題は深刻になると考えている。

実際に、在園児童の年齢層が幅広い大志万学院の場合は、学校教育も併設しているため、これまでに前述したような「学習についていけない児童」の問題も経験している。

例えば、出稼ぎによって日本から帰国したある児童の場合、7歳から9歳まではブラジルで州立の学校に行っている。しかしそこでは簡単な読み書きと、足し算引き算が出来る程度である。9歳で日本に行き2年半日本にいたが、その間の学校教育では日本語の読み書きを優先したために、それ以外の勉強がおろそかになり、11歳で戻って来た時には日本語もポルトガル語も出来ず、数学などのそれ以外の教科も勉強内容がほとんどゼロの状態だったという。

これらの事例について、大志万学院ではどのような対応をとったかについてこう述べている。

「こちらでもう一度、中学2年生をやらせて、中2、中3で、今高校2年生です。普通の高校2年生に通っています。ただ日本語が出来るということで、そこを誉めて、誉めて、誉めて…ポルトガル語の方も頑張れよということでやっていきます。」(大志万学院長)

その結果、現在は普通の高校に通うまでのレベルに達したと言う。そのように学習の遅れがあった児童を、たとえ留年をしたとはいえ、平均レベルの学習能力に追いつけた事について、

「この学校だから良かったと思うのですよ。人数も少ないし、日本語もポルトガル語も両方見てあげることが出来る。これが州立学校に戻ったら、学校に通わなくなるということが多いのじゃないかと。」(大志万学院長)

つまり児童期の再適応について大志万学院の場合は、ポルトガル語、日本語の両方を使える教員が、子どもの良い部分を誉め自信を持たせつつ、少人数でさらに個別的に援助することによって実現したと捉えられている。

第7節 おわりに

今回訪問した施設は、サンパウロ市内の中でも比較的恵まれた階層の子どもたちが通園している施設であり、日本からの出稼ぎ帰国児童はそれほど多いわけではなかった。しかしそのような中においても、いくつかの問題を垣間見ることが出来た。

われわれが保育施設を訪問した目的として、まずブラジルの保育を実際に見ることで、日系ブラジル人がどのような保育を受け、何を望んでいるのかを確かめたかったということがある。今回訪問した施設に限って言えば、日本の保育施設と比較して非常に教育的な印象があった。特に日系の園では、保育内容はもちろん、しつけの面においてそれは顕著であり、近年の日本の幼稚園や保育所と比べると、礼儀正しいことを重視した保育に思われる。

そのような教育・しつけの両面は、それぞれの園が保育の方針としてそれを行っていることだが、一方でそれは、その園に入園することを選択した保護者が望んでいることでもある。日系ブラジル

人が教育熱心であるということは、日本で行った保育所調査でもその傾向が見られていた。また、ブラジル滞在中も多くの人から「教育熱心」であることについての話を聞いたが、実際に保育施設を見ると、「日系ブラジル人は教育熱心である」という言葉が非常に理解しやすい。

しかしブラジルではそのような親の教育期待に答えてくれるレベルの園は、公立では難しい。そのため私立の施設に頼ることになるが、そこではある程度の費用がかかる。その点から言えば、日本の公立保育所や幼稚園は、保育内容や設備の点で私立の園より劣るということはない。安い保育料であっても一定水準の保育を受けることが出来る日本の保育施設は、出稼ぎで訪れている日系ブラジル人たちにとっても魅力のある施設であると言えるのではないか。

次に日本への出稼ぎの問題についてである。先にみたように今回訪問した保育施設は私立の施設であったため、日本への出稼ぎ問題は、全体の総数からみればさほど多くはないという実態であった。それでも話を聞くなかで、深刻な事例や、出稼ぎ問題に対する保育の課題にふれることが出来た。

ブラジルから日本への出稼ぎが多かった頃は、園児の出入りも頻繁であり、園全体が落ち着かないこともあったという。だが現在は、自らの経験や他の出稼ぎ経験者の話をもとに、出稼ぎにともなう家族全体のリスクを知ること、日本に行くことには慎重になっていることが、一時期よりも落ち着いている理由のようだ。

それでも、出稼ぎの問題がないわけではない。家族の出稼ぎにともなって日本から帰国した場合、学校側が最も問題と捉えているのは言語の問題であった。言葉の理解が出来ないために、その年齢で学ばなければいけないことを遣り残し、ブラジルに帰国する。ブラジルでもやはり言葉の理解が壁となって学習が滞る。特に学校教育段階ではそのことが深刻な問題であった。

しかしそれが幼児期の場合は多少異なって捉えられる。年少であればあるほど、園生活への適応に際し、言語が理解出来ないことは、そう大きな問題ではないと考えられている。確かに、幼児期の子どもは大人と比較すると、言語の問題も含め環境への適応力が高い。だが、そのような年齢の子どもであっても問題が全くないわけではないだろう。今回訪問した園は、日系の施設であるため、ポルトガル語、日本語で対応し、また目が行き届く規模の園児数であったことが問題を大きくしていなかったのだと考えられる。これがポルトガル語だけの大規模な園であれば、これとは異なる問題が生じていると考える必要があるだろう。さらに、今回は問題にならなかったが、子どもが日本で生まれその後ブラジルに帰国した場合などは、また別の問題として考える必要があるだろう。

出稼ぎに伴って帰国する場合に生じる問題として、幼児期が問題視されないことこそが、実は問題かも知れない。その視点に立ち一つひとつ丁寧にみていくことが今後も必要とされるだろう。

注

- 1) 幼児の多文化保育をテーマにした文献としては、ボニー・ノイゲバウエル編著、谷口正子・斉藤法子訳『幼児のための多文化理解教育』明石書店、1997年。大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子『外国人の子どもの保育』萌文書林、1998年。や山岡テイ監修『多文化子育て調査報告書』多文化子育てネットワーク、2001年。J.ゴンザレス-メーナ著、植田都・日浦直美訳『多文化共生社会の保育者』北大路書房、2004年などを参照。
- 2) 品川ひろみ「認可保育所に子どもを預ける親の意識」小内透編著『在日ブラジル人の教育と保

育』明石書店、2003年参照。

- 3) LDBに関してはブラジル政府のサイトを参照のこと。<http://www.presidencia.gov.br/ccivil103/Leis/L9394.htm>
- 4) Maria Cecilia Amendola da Motta 「O Direito da Criança à Aprendizagem」 OMEP BRASIL – Organização Mundial para Educação http://www.omep.org.br/artigos/direito_da_crianca.htm.
- 5) 幼稚園教育要領 文部科学省。
- 6) 赤間学院ピオネイロのホームページを参照 (<http://www.pioneiro.com.br/japao/fundacao.htm>)。
- 7) 前掲、品川ひろみ「認可保育所に子どもを預ける親の意識」185頁参照。

(品川ひろみ)